東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 7:38-61

フランスにおけるイスラーム恐怖症と北アフリカ出身移民による「イスラーム」イメージ再修正の試み

渋谷　努

１．はじめに

フランスを含むヨーロッパ諸国が現在直面している問題のひとつに、イスラーム主義者によるテロがある。2001 年 9 月 11 日のニューヨークでの飛行機テロは世界を震撼させたが、その後ヨーロッパにおいても、2004 年のスペイン・マドリッド郊外での列車テロ、さらにロンドンの空港爆破未遂事件などが続いて起きた。ヨーロッパでのイスラーム・テロ事件では、テロの実行犯の中に、北アフリカ出身移民の子供たち、いわゆる第二世代が含まれていた。

つまり、ヨーロッパ社会の中にイスラームが浸透し、内部からヨーロッパ社会に攻撃を仕掛けている。これは、日本だけではなくフランスやイギリスの新聞記事にもよく見られる論調だが、この論調がフランス社会にあるイスラームに向けての見方の総意を示しているのではない。しかしマスコミが提示するイスラームへの否定的な見方は、社会がイスラームに対して抱くイメージを生成する際に大きな影響力を与えた（サイード 1996[1981]:2）。

フランスに住むムスリムの特徴は、フランスに元々住んでいてキリスト教からイスラームに改宗する人は少ない点である。そこで、現在フランスの宗教人口の中では第二の地位を占めるムスリムは移民及びその子供たちと言うことになる。つまり、フランス社会の中でイスラームは、移民というマイノリティ集団の宗教である。

フランスの雑誌や新聞を見ると、イスラームに関する記事にはislamisme（イスラーム主義）という単語を用いることが多い[1]。この用語には暴力的な側面への批判が込められており、結果的にマスコミ報道がフランス社会に敵対する「イスラーム」というカテゴリー

[1] それに対し原理主義という単語は、日本では多くマスコミで用いられる。原理主義はキリスト教の一派を元々指すものだったが、1980 年代頃から、イスラームにも適用されて用いられるようになった。そして保守的で暴力的なイスラーム勢力を指す場合に、批判的な意味を込めて日本で用いられている。フランスの場合では、日本で用いられる原理主義に担わされた批判的で暴力的な意味を込めて、islamisme が用いられている（私市　2004:2）。

を形成し、そこに独特の意味を与えたことになる。

これまで、フランスで行われてきたイスラーム・イメージの研究は、「移民」イメージ研究の一部として行われてきた。その研究ではフランス社会におけるイスラームやムスリムの表象の仕方を通時的に分析することによって、イスラームを受容したり排斥したりする言説が形成されてきた過程を明らかにした（Schor 1985,Gastaut 2000）。しかし、今までの研究では、マスコミによるイスラーム・イメージが地域住民のムスリム認識に対して与える影響に関して問うことはなく、ムスリム移民の活動が地域社会でのイスラームやムスリムさらにフランス社会の表象の仕方に対して与えた影響についてもそれほど考察してこなかった。

そこで、本稿では、最初にフランス社会の中でイスラームがどのように表象されてきたのか、特に 1980 年代以降、メディアによってイスラームとムスリムというカテゴリーが形成された過程を素描する。具体的にはフランスのパリ郊外で、移民が中心になって形成した地域団体「共生　C通り」[2]を取り上げ、団体の活動、特にイスラーム教室について考察する。イスラーム教室が、教室への参加者及び参加していない当該地域住民にどのような影響を与えているのか、メディアによるイスラーム・イメージに大きく影響を受けていた非ムスリムたちがムスリムをどのように見なすようになったのか、そして多数のムスリムを含むようになったフランス社会を非ムスリムの地域住民はどのように見なすようになったのか。さらにフランスに住むムスリムたちは、非ムスリムをどのように見なすようになり、自分たちに与えられた移民やムスリムといったステレオタイプ的なイメージをどう捉えるようになったのかを考察する。

本稿で用いる言葉の定義を前もって明らかにしておきたい。本稿で用いる移民という言葉は本人が祖国からフランスに渡った者及びその子を指すものとする。つまり移住第一・第二世代のみを移民と呼びそれ以降の子孫はフランス人と呼ぶことにする。ちなみに、本稿に出てくる北アフリカ出身者のうち、移住第三世代に属する者はいないため、全てを移民と呼んだ。また、この定義では人の移動のみを基準としているため、国籍を考慮に入れていないが、本稿で言及する移民の半数以上はフランス国籍を取得していた。

[2] 以下で用いる団体名、個人名はプライヴァシー保護のため仮名にしている。

２．調査概要：居住地と住民の属性

次に本稿で用いたデータを収集した調査について述べる。私が調査を行った期間は、1998-99 年の約 2 年間、さらに 2004 年の 2-3 月及び 2005 年 2-3 月の間である。調査を行った地域は、ナンテール市 C 通り周辺にある約 20 の集合住宅からなる地域だった。主に調査対象となったのは、「共生 C 通り」の主要メンバー28 人であり、彼らに対してインタビューをおこなった。主な調査内容としては活動動機や活動への期待などだった。また、当該地域に住む地域活動に参加していない住民に対しても、活動に関する聞き取り調査を行った。

C 通り界隈の歴史を振り返ってみると、1950-60 年代にかけて、移住者による不法居住があり、バラック小屋が林立するスラム化が生じた。しかし、1960 年代以降バラックは撤去され、その後に集合住宅が建設され、工場が誘致された。バラックの撤去にともない、それ以前に住んでいた住民の多くは、フランス国内の他地域に移出していった。

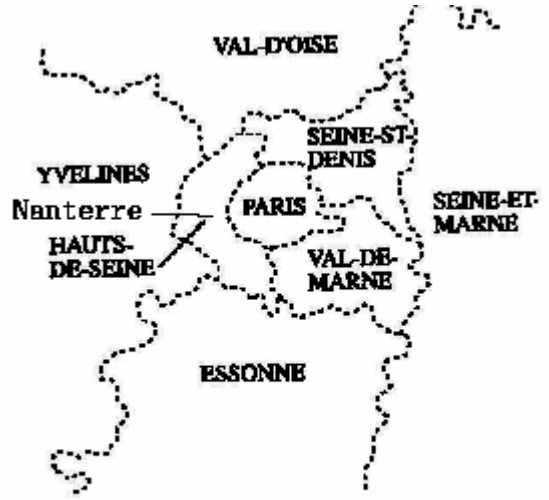

図 1：パリ近郊地図

次に調査当時 2005 年 3 月での、調査地に住む住民の属性について紹介する。基となるデータは、私自身が集めたものと「共生 C 通り」による調査結果に基づいている。世帯数は約 400 世帯、人口は約 1500～1800 人だった。地域住民内の就労者の職業に就いてみてみると、単純工 37%、失業 16%、事務職 7%、パート（不定期労働）24%、その他 10%、不明 6%となった。次に住人を出身国別に分けてみてみると、アルジェリア 33%、フランス（２世代以上の先祖がポーランド、スペイン等ヨーロッパ出身者を含む）22%、モロッコ 13%、セネガル 6%、マリ 5%、チュニジア 5%、その他（10%）、不明（6%）となった。

以上の数値から当該地域を特徴づけるとすると、フランス人よりも移民出身者、特にマ

グレブ諸国出身者が半数で（全体の 51%）、職業も単純工や不定期労働、失業者が多く、メディアが移民と失業者が多い「郊外」と呼ぶ地域にあてはまる。住民たちの多くも、自分たちの居住地が社会問題となっている「郊外」に当てはまると認識しており、そのような現状を問題視している者が多かった。また、移民と関連してこの地域住民が問題視したのは、極右政党の躍進と移民排斥運動の高まりで、具体的には地方選挙の際に極右政党が躍進したことや、「この地域に見られる落書きに移民は必要ない」とか「移民は出ていけ」「イスラームにノン（否）」といった移民やイスラームを否定的に取り上げたものが多く見られたことなどがあげられる。

３．イスラームの休止から潜在的なイスラーム

北アフリカからフランスへの人の移動は、フランスの植民地時代から始まった。フランスはマグレブ諸国を植民地化・保護領化すると、この地を人的資源の源とみなし大量の労働者を入れはじめた。この時期が第一次大戦と重なり、最初に労働移民が派遣されたのは軍隊だった。それに続き、化学工場、工事現場、炭坑などへの労働者が植民地から補われた。

続いて第二次世界大戦期間にも、マグレブ諸国から多くのものがフランスに渡った。労働者や兵の多くは戦後に故国へ帰されたが、それにもかかわらずフランスにおけるマグレブ出身者数は増加した。1965 年にアルジェリア戦争が終わり、フランスの景気が回復するとともに、外国人の移入数はさらに増加していき、非合法的に入国してくる者も増え始めた。

私が調査を行ったモロッコ移民たちの多くは、この当時にはフランスでの滞在は一時的なものでいつかは故郷に帰ると考えた。そして彼らの宗教活動に関していえば、一日五回の礼拝や断食などのムスリムの義務を守っていた者は少なかった。多くの移民たちはフランスに滞在している期間を宗教生活において休息の時期と見なしていた。彼らは、宗教生活は自国に投資できるだけの貯蓄をした後、母国に帰ってから再び始めると考えており、旅行中のムスリムが戒律を緩めることが認められるように、非ムスリム世界に住んでいる自分たちも戒律に厳密である必要がないと考えていた。さらに、フランスで生活していくうちに、飲酒などイスラームに反する「悪習」に染まる者もいた。

このようなイスラームの休止の状態は、フランスの移民政策の変更によって変わった。戦後の経済成長の後、1970 年代から、フランスを含むヨーロッパ全体で景気が後退し、失業率が高まった。ドイツなど他のヨーロッパ諸国が移住労働者の受け入れを停止していく中で、フランスも 1974 年に新規移住者の受け入れを停止した。この政策がそれ以降の移民の生活スタイルに大きな影響を与えたと言われており、それは宗教の側面にも当てはまった。

この新しい政策について、移民たちの間では一度フランスを離れると、二度とフランスに入国することはできなくなる、といううわさが広まった。そこで、移民たちの間では、故郷に戻るかフランスに住み続けるのかという二者選択にせまられているという反応が生まれた。移民の大部分は、モロッコに帰っても職が見つかるとは限らないといった経済的理由や、フランスの方が電気や水道などのインフラストラクチャーが整備されているといった生活環境上の理由でフランスに住み続けることを選んだ。その後、移民たちは家族をフランスに呼び寄せ始め、フランスに定住化していった（渋谷　2005）。

定住化とともに、移民たちはもはや宗教を休止してはいられなくなった。彼らが仮の滞在としていたフランスでの生活が、彼らの「本来」の生活の場になったからだ。移民たちはイスラームの教えに戻り始めた。

この時期の移民たちはフランス社会から隠れて宗教活動を行っていた。ムスリムにとって金曜日のお昼に行う集団礼拝は特別なものだ。そこで移民たちは新たに小さなアパートの一室を借り、そこで金曜日に集まって礼拝を行うようになった。そこで礼拝を行っていることが周囲の住民に気づかれないように、音を立てないようにしたり装飾には気をつかった。移民たちに当時の話をしてもらうと、ムスリムが集まって礼拝などで物音をたてすぎると、周囲の人から迫害を受けるのではないかと恐れていたと語った。

このように 70 年代までの間、移民たちの多くは、フランス社会から隠れてイスラームを実践していたこともあり、マスコミの報道に取り上げられることもほとんどなかった。

４．イスラームの可視化とイスラームの脅威

次に 1980 年代以降、フランスで形成されたイスラーム・イメージが構築された過程を考察するために、国際的な事件とフランス国内のムスリムによる活動に関するフランス社

会のメディアによる報道の影響を検討する。

国際的な事件とイスラーム・イメージ

イラン革命

フランス社会でイスラームがメディアに取り上げられるようになったのは、国際問題としてだった。とりわけ大きく取り上げられ、その後のフランス社会のイスラーム・イメージに影響を与えたのは、1979 年のイランでのイスラーム革命だった。さらにイランでのアメリカ大使館占拠事件や、イスラーム主義の名のもとでの人質拉致事件、そしてイラン・イラク紛争といった暴力に関わる事件が続いた。これらの事件は、Le Monde や Figaro といった日刊紙やテレビで大きく取り上げられた。そこでの論調は、狂信的な信徒による革命であり、「ホメイニにノン（否）と言うべきである」と、主張していた（Gastaut 2000:493-495）。

このような暴力事件に加えて、石油ショックによるオイルの高騰やそれによって儲けたアラブ諸国への反感も重なり、イスラームとフランスに住むムスリム移民へのイメージが悪化した（Sallem 1987:210-211）。

ラシュディ事件

1989 年にイギリスでラシュディ事件が起きた。サルマン・ラシュディがイスラームの預言者ムハンマドを冒涜すると見なせる描写を含んだ小説を発表したことに対して、イランのホメイニが死刑を宣告し暗殺を指令したのである。

フランスでもホメイニの反応をマスコミが取り上げ、イランの指導者に対して批判的な記事が載った（Le Nouvel Observateur 2/3/1989）。しかしフランス社会に住むムスリムたちの間では、ラシュディに対するデモ抗議が起きた。1989 年 2 月 26 日にパリ市内のアラブ人集住地域として知られるバルベス地区でパキスタン出身者を多数派として、インド、トルコ、マグレブ、アフガニスタン出身者が集まってデモ行進を行った。彼らは「私たちはすべてホメイニ派だ。ラシュディに死を」と叫びながら行進した（Le Monde 1989/2/28）。ムスリムたちのデモについてのこの記事ではホメイニによるラシュディへの暗殺指令を支持することで、フランスに住むムスリムたちが小説を発表するという言論の自由を踏みにじり、狂信的であるという点が強調的に報道された。

国内ムスリムの活動とイスラーム・イメージ

モスクの建設とその反対

フランス社会の中でイスラームに対して狂信的な宗教というイメージが形成されつつあった 1980 年代中頃から、移民たちの間では宗教活動にも大きな変化が生じ始めた。それまでとは異なり、移民たちが目に見える形で宗教活動を始めたのである。移民たちはイスラーム宗教団体を結成し、モスクを建築したり、様々な地域活動および移民たちの相互扶助を行い始めた。モスクの建設とは、フランス社会に対して自分たちがムスリムであることを公に示すものだった。1980 年代後半にはパリ及びその郊外の地域にモスクが３０以上あったと報告されている（Kepel 1987:229-242）。

移民たちはモスクの建設のように、明確な形で自分たちの宗教を示すようになったが、同時にフランス社会との共存を意図した活動も行い始めた。イスラーム団体は自分たちだけの宗教的活動だけではなく、フランス社会に向けた文化活動も行っていた。彼らは、同じ地域に住むムスリムではないフランス人にイスラーム・アラブ文化を知ってもらうためにアラブ音楽のコンサートを開き、クスクスやタジンといった北アフリカ料理の教室を開いた。さらにフランス社会との交流を深めるためにスポーツ大会をも企画した。彼らの宗教団体はアラブ文化センターも兼ねるようになっていった（Kepel 1987:229-242）。

フランス社会との共存のための同様な配慮はモスクを建てる際にも見られた。たとえばマルセイユにある宗教団体は、自分たちのモスクを建てる際に、イスラーム的な建築様式にし過ぎると非ムスリムの反感を買うのではないかと考え、アラブ・イスラーム的建築と西洋的建築との中間的様式を採用した（Cesari1994：90）。

このようなムスリム側によるフランス社会との共存のための配慮にもかかわらず、フランス社会側ではモスクを建設するのに反対意見を持つ者が多かった。1989 年 10 月 5 日の Le Monde は、「モスク建設反対」というタイトルの記事を掲載したが、その論旨はモスクの増加が狂信的で「シーア派」的なイスラーム主義者を増加させることになるだろうというものだった。同様に、1989 年及び 1990 年での世論調査でも、一般論としてはムスリムがモスクを建設することは認めても、自分たちが住んでいる地域の中にモスクを建てることには反対する者が多数を占めた（Le Point 1989/10/30,Le Nouvel Observateur 1990/09/13）。モスク建設という目に見える形で活動を始めたムスリムたちに対して、フ

ランスのメディアや世論はムスリムを危険な存在と見なし、フランス社会と共存できないと論じ始めた。

スカーフ事件[3]

1989 年、パリ郊外の中学校に女子生徒がスカーフを着用して登校し、スカーフを着用して授業を受けることを要求した。しかし校長はそれを拒絶した。教室内でのスカーフ着用が共和国の原則であるライシテ（非宗教性）に反する恐れがあるからというのがその理由だった。

この当時フランス政府は、移民受け入れ政策の一環として「相違の権利」を提唱していた。文化の違いを尊重する「相違の権利」のもとでは、スカーフ着用を単純に否定できない面があったから、このスカーフ事件はフランス全土での政治問題へ発展した。当時、国民教育相だったジョスパンはスカーフ着用の登校を認める発言を行ったが、当時与党であったフランス社会党の中でも反対が多数を占めたと言われている。このように政治の世界でも議論が紛糾し、最終的に裁判所に調停を申し出た。しかし裁判所の判断は、学校内での宗教活動は禁止だが、スカーフを付けての登校を認めるかどうかは校長の判断に任せるという曖昧なものだった。

その後、2004 年にライシテを徹底化する法律が制定されたことで、スカーフを着用して学校に通学することは認めないというかたちで事件は決着することになった。この法案が可決された時に抗議した女性の中にはフランスで大学を卒業した者や現在大学に通っているような高学歴で、フランス語ももちろん堪能で、非常にフランス社会に適応している者がいた。彼女たちは、フランス社会の中でイスラームを信仰することを認められることを求めた。そして、スカーフをかぶることは、彼女たちにとって個人の自由意志の表現だと主張した（内藤 2004:148-149）。

この事件では、イスラームがフランスの共和制の原則であるライシテと対立する点が「狂信的なイスラーム」（Le Nouvel Observateur　1989/10/5）「共和制に敵対するイスラーム」としてメディアによって強調された（Le Point 1989/10/30）。

さらにこの事件をきっかけとして、移民の子供たちがイスラームを信仰し始めているこ

[3] スカーフ事件の概要に関しては、海老坂（1992）を参照。スカーフ事件とフランスの非宗教性に関する法学的及び社会学的議論に関しては林（2001）、内藤・阪口（2006）を参照。

とが取り上げられるようになった。そしてフランスで生まれた第二世代がイスラーム主義に取り込まれているということを、「郊外：イスラーム主義の誘惑」（Le Nouvel Observateur 1992/1 1 /12）「イスラーム主義者はブール第二世代をどのようにして取り込んだのか」（L'événement du jeudi 1993/11/4）と報道することで、第二世代と「危険な」イスラームとの関係を強調した。

イスラームに対する恐怖

その後、狂信的で暴力的なイスラームというイメージは、911 のテロなどの国際的な事件の報道で強化された。そして 2004 年のスペイン、マドリッド近郊での列車テロが早朝に起きた日の午後、たまたまフランスで調査を行っていた私は、調査対象地域に住む非ムスリムたちが「あれはムスリムのやったことだ」とうわさしているのを聞いた。結果的にはその推測は当たっていたが、その時点ではスペイン当局も容疑者を公表しておらず、非ムスリムが抱く暴力的なムスリムというイメージが顕れた例といえる。

フランスでのイスラームに関する報道は、国際社会や国内でのムスリムによるモスク建設からテロ行為にいたる活動をとおして、西洋文明とイスラーム文明との対立という趣旨で論じることが多かった。その結果イスラームを信仰している移民たちは、フランス社会に同化できないと論じるようになっていった（Gastaut 2000:504）。

しかしフランスに住むムスリムたちは、実際にはモスク建設に際しては、フランス社会との共存を実現するためにその様式や大きさを変更していた。また、2004 年のライシテを強化する法律に対して反対した女子生徒たちの場合も、自分たちの宗教の自由というフランスの共和制が認めている権利を行使するために抗議を行ったのだった。彼女たちはフランスの教育を受け、自由と平等の精神を受容したからこそ、逆にスカーフ着用を信条や表現の自由のひとつとして行ったといえる。このようにムスリムたちはフランス社会と調和したイスラームを探求しながら宗教実践を行っていたが、彼らのフランス社会への適応過程が報じられることは少なかった。

以上のように、イラン革命やラシュディ事件に関する報道をとおして、西洋に反対するイスラーム主義といったイメージや、スカーフ事件やモスク建設に関する報道からイスラーム化するフランスへの恐れといったイメージが強調された。Le Nouvel Observateur の通信欄に、読者からのフランスがイスラーム化する恐怖についての次のような投稿が載っ

たのは、その結果と考えることができる。

> 100 年の間にムスリムがフランスの多数派になるだろう。その前に内乱が起きて何万人という人が死ぬだろう。そして[フランスは]キリスト教社会ではなくなってしまうだろう（Le Nouvel Observateur　1986/2/28）。

このようなフランスのイスラーム・イメージについてモロッコ出身の作家タハール・ベン・ジャルーンは次のように書いている。

> 多くのフランス人にとって、数少ない東洋学者や専門家を除いて、イスラームは遠くて曖昧なものとして受け取られていた。しかし、イスラームは今日、西洋の市民の生活に乱暴に侵入してきた。西洋の市民たちはこのショックに対して準備しておらず、正しく情報を与えられることはなかった。人々は差異について語る代わりに狂信や独裁について語った（Le Monde1979 /11/12）。

フランス社会と共存しようというムスリム側からの試みはほとんど注目されることなかった。ベン・ジャルーンが論じているように、イスラームは狂信や独裁といった否定的なイメージで表象されることで、フランスを含むヨーロッパ社会と共存できず危険な宗教というステレオタイプが作り出された。そしてフランスとムスリムという区分が明確になったといえる。

５．「共生C通り」の主な活動

本稿で取り上げる「共生 C 通り」の活動の発端となったのは、偶然の出会いだった。1994 年の春先に、地域内にあるカフェで、たまたま同地域内に住む 4 人の男性が同席になった。それまで彼らの間ではすれ違った時に挨拶をする程度の関係しかなかった。カフェを飲みながらテーブルを挟んで話題となったのが、彼らの居住地域で見られた建物の破壊や自動車の放火などの治安の悪化や、落書きや暴力行為など地域に住む少年の非行の問題であり、それを取り締まらない警察や何もできない地方行政への不満だった。

偶然のように始まった彼らの会話は、不満を述べるだけでは終わらず、積極的に自分たちが抱えていた問題を解決するにはどうしたらいいのかという実践的な方法の模索へと展開していった。行政が問題に対応してくれないのならば、できるだけ自分たちで解決してみようという意見が出た。手初めに、日曜日に自分たちが住んでいる近辺の壁に書かれて

いる落書きを消し始めた。

彼らの落書き消し活動は一回で終わらず、その後もだいたい2週に1度の頻度で続いた。さらに彼らの活動は、落書き消しに留まらなかった。彼らは数ヶ月後には治安維持を目的とした巡回を土曜日ごとにやり始めた。

これらの活動を担ったのは、当初は、主にカフェで知り合った先述の 4 人だった。その後、彼らの妻たちや友人たちが手伝うようになった。さらに彼らが活動を続けていく中で、飛び入りで参加する者が増加した。

このように「共生 C 通り」は、自分たちの生活環境に見られる諸問題を共有した近隣住民による自発的な活動から始まった。この当時の活動は、自分たちの居住地区の美化と治安維持を目的としていた。活動の中心は、発起人の 4 人とその妻や友人などからなる 10 名弱だった。またこの当時には、活動を仕切るリーダー的な存在はいなかった。

その後、2004 年に筆者が調査を行った時点での「共生 C 通り」の活動は、地域の美化活動に加えて、子供たちの教育や非行、失業、移民問題といった社会問題を取り扱うまで広がっていた。彼らは地域の子供たちのための補習授業を行い、年に数回フランス国内への遠足を行なった。また月に一回か二回、失業や経済、移民問題、教育に関する専門家を招き、勉強会を行った。さらに月に一回程度、打ち合わせや活動報告を行うための例会を開いていた。会が終わった後は、主要メンバーの親睦を深めるために飲みにも行き、ホームパーティを開いたりもしていた。会の活動の中で最も大きい行事は、夏に行う地域の祭りだった。それは夏のバカンス時期にどこにも行けない子供たちのために出店を出して楽しませるだけではなく、子供たちによる劇や歌を地域住民と楽しむ機会ともなっていた。勉強会や補習授業、遠足に頻繁に参加している者の数は、3 つを合わせて 100-150 名だった。

６.「イスラーム教室」開始の背景と現状

「共生 C 通り」と民族・宗教

会の活動方針で問題となったのは、団体の活動として「民族的」なもの、特に子供たちに対する出身言語の教育を行うかどうかだった。団体の主要メンバーの一人であるムラッドはモロッコ出身で、留学でフランスに渡り、その後大学をおえてから中学校の教師に

なった。ムラッドは、別の団体で主に北アフリカ出身移民を対象にアラビア語を教えていた。彼は親の出身国の言語を学習することで、子供たちは自尊心を獲得できると考えており、同様な活動を「共生 C 通り」でも行うのはどうかと提案した。

ムラッドの案に対して、北アフリカ出身者の中には同意する者もいた。彼らは自分たちの子供にアラビア語やイスラームの基本的な教義を教える機会が必要と考えていたため、ムラッドの語学教室を開くという案に賛成した。

それに対して反対意見を持つ者もいた。団体内で活動している人々の中には、マグレブ出身者も多いが、フランスやカメルーン出身者もいる。そこで、それぞれのグループが語学教室を行えば、団体としての統一感を維持することが困難になるという趣旨の反対意見だった。実際に、複数の語学教室を行う教師や場所を確保することは困難だった。また語学教室は既に近隣地域にある様々な移民団体が行っているため、今更自分たちが行う必要はないと彼らは判断した。さらに「共生 C 通り」のメンバーには様々な地域出身者が含まれており、団体の統一感を維持するためにも「共生 C 通り」は出身国や民族といった枠組にとらわれないで活動する必要があると主張した。この意見に同調する者が増えたので、ムラッドは自分の意見を取り下げて、この団体では民族的な活動を行わない方針が決まった。

同様に宗教に関しても、この団体では宗教的な活動を行わないことにした。彼らはフランスのライシテを踏襲して団体の公的場面での宗教的活動を自粛した。次に取り上げるイスラーム教室が開催されるまでは、特定の宗教に関する教育を団体が公的活動として行うことはなかった。また各宗派にもとづいて行われる各種祭礼も、団体の活動として行われることはなかった。宗派という枠組で団体内部が細分化してしまい、分裂することを恐れてのことだった。

「イスラーム教室」開始の背景

この団体では、イスラームという特定宗教に関する活動を自粛してきた。しかし 2005 年末頃に、ムスリムではないメンバーの一人ソフィアから先述のムラッドに対して、イスラームの勉強を個人的にしたいという相談があった。それに対してムラッドはイスラームの基本的な考え方を概説書などを用いて個人的に教えていた。

ソフィアがイスラームに興味を持つようになったのは、フランス社会でのイスラームの

脅威をあおる雑誌やテレビの報道が引き金となった。特にテレビや雑誌に載ったムスリムたちの礼拝の映像を見ると、彼女はムスリムたちから宗教熱心で肯定的な印象を受けた。彼女は彼らの映像とイスラームを否定的に捉えるコメントとのギャップに違和感を抱いた。そこでソフィアはフランスの報道とは別に自分なりにイスラームを勉強してみたいと考えるようになった。

ムラッドによる個人指導が数回行われると、それを見ていた他のメンバーの中にもイスラームに関して知識を得たいと望む者が出てきた。彼らの多くもソフィアと同様に、フランス社会でのマスコミの報道をきっかけとしてイスラームへの興味が喚起されたのだった。

ムラッドは個人指導の要望があったことから、非ムスリムの中にイスラームについて知りたいと考える者がいることに気づいた。否定的にイスラームを報道した映像を見慣れていたムラッドにとって、フランス社会の中にイスラームを積極的に評価し、進んで学ぼうという「フランス人」がいることが驚きだった。このことはイスラームを敵視するフランスのメディアとは異なる、自分たちの周囲に住むフランス人たちをもう一度見直すきっかけともなった。

イスラーム教室は、非ムスリムからメディアによるイスラーム・イメージに違和感を抱いていた非ムスリムであるフランス人からの要望から始まった。このことはムスリムの抱いていたフランス人へのイメージを再考させるきっかけとなった。

「イスラーム教室」の内容

ムラッドはイスラーム教室を始めるのに、この活動を団体活動の一つとして行うかそれとも団体とは関係なく個人的な活動とするかを、主要メンバーとともに話し合った。その中では、議論のはじめにイスラームという特定宗教に関する教室を開くのは、団体の方針である非宗教性や特定民族に偏った活動を行わないという活動方針に抵触しないかという疑問が提示された。しかし教室開始の要望はムスリム側からではなく、非ムスリム側からであるため、イスラーム教室を開催したとしても特定の集団が利するわけではないという結論に達した。団体活動の中でイスラームに関する教室を開いても、宗教対立は起こらないだろうと判断した。

イスラーム教室は、「共生 C 通り」が主に活動をしている当該地域のコミュニティセンターの中の一部屋を借用して、2006 年初頭に始まった。それ以降、夏や冬のバカンス期間

を除いて、およそ月に一度の割合で 2007 年末までに 15 回行われた。会への参加者は、およそ 8 人で、そのときの都合で来られない人がいた場合には、3 人で開催したこともあった。

参加者の内訳を見ると、性別では男性が 3 名と女性が 5 名だった。宗教別に見ると参加している 8 名の内 6 名が非ムスリムで 2 名がムスリムだった。ムスリムの内一人は教師役のムラッドで、もう一人はムラッドが補助として連れてきているフランス生まれの第二世代女子のファティマだった。

教室では、テキストを参加者で読みあい、そこで生じた疑問点をムラッドやファティマに質問し、それをきっかけとして議論が展開した。教室で最初に用いたテキストは、モロッコ出身の作家タハール・ベン・ジャルーンが書いた「娘に語るイスラーム」だった。この本は父親が娘に様々な問題をわかりやすく説明する形を取った入門書のシリーズの一冊である。ベン・ジャルーンによるイスラームの入門書も、イスラームの教義を概説的に説明する部分とともに、フランスとイスラームとの関係を現代的な視点から解説した内容だった。

この本を最初に読み始めた理由を、ムラッドはフランス社会の中でイスラームがどのように問題視されているのかを理解してほしく、さらにイスラームの教義中心よりもフランス社会の中でのイスラームの現状の方が、受講者が求めているものと考えたからだと説明した。このことからも、ムラッドがイスラーム教室の目的を、単にイスラームの教義を理解してもらうことよりも、フランス社会の中でのイスラームの現状を理解してもらうのを目指していることがわかる。

その後、何冊か別のイスラームに関する概説書を読んでおり、将来的にはフランス語訳ででも、コーランを購読することを計画している。

イスラーム教室では、テキスト購読以外にもイスラームの知識を深めるための活動を行った。その中には、パリのモスクを見学し、イマームから講話をしてもらうことがあった。ムラッドの妻やその友人が中心となってモロッコ料理の講習会を行った。ムラッドの友人でモロッコの民族音楽を行う楽団のメンバーの一人から、モロッコに伝統的な楽器の演奏方法やアラブ音楽の特徴を教わることもあった。さらに当該地域に住むムスリムと、宗教に関して、特に礼拝や断食などイスラームの実践に関してやフランス社会で生活する上での困難さについて話をしてもらい、意見交換を行った。

このようにイスラーム教室ではイスラームの教義も学習しながら、同時にフランス社会でのイスラームの現状を知ることができるような課外活動も行っていた。

7.「外」からの評価

このようなイスラーム教室に対して、参加していない主要メンバーや当該地域に住む者たちはどのような評価をしているのかを見てみたい。ただ、本稿で取り扱うのは、団体に主に活動している 28 名と当該地域に住む 30 世帯である。

無関心

当該地域に住む者がこのイスラーム教室に関する意見を求めると、最も多い反応は無関心だった。その中には、教室の活動を知らないものもいれば、知っていたとしても何ら関心を持っていない者も含まれた。イスラーム教室の活動は団体「共生 C 通り」が発行している冊子の、会の活動予定の中に記載されてはいるが、コミュニティセンターや地域内に張り紙を貼るなどして外部者に参加者を募ることはしていなかった。そこで「共生 C 通り」がイスラームの教室をしていることに気づいていない者が多かった。

無関心の者の中には、居住地域にはメディアが取り上げるような過激なムスリムはいないだろうから、イスラームにはそれほど関心がなく、それよりも治安や失業の方が大事だと述べる者もいた。

またムスリムであって、特にイスラームを学ぼうと考えている者にとっては、このイスラーム教室が非ムスリムを主に対象としているために関心を引かなかった。彼らにとっては近くのモスクなどが行っているイスラームの講座が主要な関心の対象だった。

このように、地域内に住むムスリムにしろ非ムスリムにしろ、多くの者は「イスラーム教室」に関心を持っていなかった。それは、単に気づいていない場合もあれば、このような活動が地域社会に対して影響を与えることはなく重要ではないとの判断に基づく場合もあった。

肯定的評価

私が質問を行った人々の中には、イスラーム教室の活動を肯定的に評価する人もいた。

ただその大部分は、実際に会がどのような活動をしているかを知っているわけではないが、講師役を務めているムラッドと私が親しい関係を持っていることを知っているため、「地域の文化活動として意義のあることだ」と、抽象的な言い方で肯定的に評価をすることが多かった。

しかしムスリムの中には、このような会が行われることで、地域内の非ムスリムの住人に正しいイスラームの知識が広まり、イスラームの理解が高まることを期待する者もいた。彼らはフランス社会でのイスラームの報道に対して、一方的で偏っており、それがフランス社会の中で自分たちの立場を悪くさせると考えていた。そのために、このような会の活動が実際にはそれほど成果を上げなかったとしても、少しでもフランス社会に対して自分たちの主張をする機会であると考え肯定的に評価していた。

否定的評価：恐怖と排他性

上記のような肯定的な評価よりも多かったのが、この会の活動を否定的に評価する人々だった。ムスリムにしろ非ムスリムにしろ、その中には、この会の活動がイスラーム主義者を当該地域の中で生み出すかもしれないと怯える者もいた。さらにこのようなイスラームに関する活動が地域内の反イスラーム感情を喚起するかもしれないと不安がるムスリムもいた。地域内に住むムスタファ（47 才）は、教室が開かれたことで生じるかもしれない不安について次のように語った。

> このような会があると知ると、中には自分たちの地域がムスリムで一杯になってしまうと考える者が現れる。そのような人たちは自分たちの生活環境を守るために、ムスリムを追い出さなければならないと考えるようになる。

地域内住民の中には、80 年代以降のフランスメディアによるイスラーム恐怖症が地域内にも浸透しているため、イスラーム教室のような活動がイスラーム勢力を増大させるような印象を与え、そのような外部者を排除するために反イスラーム勢力が台頭し、地域内の関係が悪化することをおそれていた。

またムスリムの中には、ムスリムではない者にはイスラームを理解することはできないと見なし、彼らにイスラームを教えても理解できず、このような教室をしても無駄であると判断する者がいた。彼らは、非ムスリムがイスラームを趣味の一つとして勉強したとしても、イスラームを理解することはできないと見なした。このようにムスリムと非ムスリ

ムとを明確に区別するのは、年長者だけではなくフランスで生まれた第二世代の中にもいた。アルジェリア出身者が両親に持ちフランスで生まれたラシッドは、この教室を次のように評した。

> ムスリムじゃないのにイスラームを勉強しても何がわかるんだ。彼らはアラビア語を勉強しようとは考えていない。アラビア語でコーランを読まなければイスラームを分かるはずはない。

イスラームの中ではアラビア語の持つ宗教的な意味が強く、イスラームを理解するにはアラビア語を習得することが必要と考えられている。そこでこの教室で行っているようにフランス語のテキストのみを読んでいても、イスラームを「正しく」理解することはできないと判断したのだった。

８．参加者からの反応

以上のような無関心、肯定的、否定的というさまざまな理由で参加していない周囲の者からの反応に対して、次に教室に参加している者の反応を見ていこう。

非ムスリムによるフランスのイスラームの発見

教室に参加している非ムスリムの反応は、非常に肯定的だった。この教室に参加することで、フランスのイスラームの実情が分かったというものだった。

> この教室をとおして、イスラームの基本だけではなく、フランスに住むムスリムの生活が少し分かってきた。彼らはできるだけフランスの法律や文化とぶつからないように工夫しながら自分たちの信仰を守っていた。（男性　54 才　不定期労働）

教室に参加している者は、イスラームの教義や信仰のあり方の基本的な部分を学ぶことができたとともに、自分たちの居住地域内に住むムスリムたちの信仰生活の実態をかいま見ることができた点を高く評価した。

> これまで近隣に住むマグレブ出身の人と道であったら挨拶くらいはしたけれども、この会で初めて彼らと宗教に関する話をすることができた。そして彼らがイスラームをどのように信仰しているのかを知ることができた。（女性　47 才　主婦）

そして、自分たちのそばに住むムスリムたちの信仰をとおして、マスコミによるステレ

オタイプ化されたイスラーム像に違和感を抱くようになった。

> フランスに住むムスリムたちは、自分たちの信仰を工夫しながら、フランスでの生活と両立できるようにしていた。彼らの信仰は雑誌や新聞が言っているイスラーム主義とは違っていた。彼らの宗教をとおしてイスラームの柔軟で適応的な面が分かった。（女性　32 才　事務職）

参加者は、イスラームの教義が、新聞や雑誌が報道するイスラーム主義的のように教義に固執するのではなく、現実に即した適応的なものであることを見出すとともに、自分たちの身近に住むムスリムとアルカイーダに代表される過激なイスラーム主義者との間に大きな差異があることを理解するようになった。

また、参加者の中には、このようなイスラームをフランス社会は積極的に受け入れて行かなくてはならないと考えるようになった者もいた。

> 彼らがあれだけフランス社会に適応しようと努力しているのだから、私たちも彼らを認めなければならない。必要ならば私たちを、フランスの社会を変えていかなければならない。（女性　38 才　事務職）

イスラーム教室に参加することが、非ムスリムのフランス人も、イスラームを受け入れるために自分たちのムスリムに対する意識や社会のあり方を積極的に変えていかなければならないと考えるきっかけとなっていた。

参加者にとってこの教室はイスラームの基礎を学ぶとともに、メディアによって与えられた画一的なイスラーム・イメージとは異なる、自分たちの地域内に住むムスリムたちの実際の宗教生活にふれることで、フランスでのイスラームの多様で柔軟な現状を認識するようになった。そしてマスコミによって与えられたイスラーム・イメージを再構築する機会となった。さらにイスラームとの関係から自分たちフランス社会のあり方を再考するきっかけとなっていた者がいた。

第二世代とイスラーム

次に、教室に参加しているムスリム側、特にムラッドによって参加するように求められたファティマ（モロッコ出身者を両親に持ちフランスで生まれた二世）の意見を採り上げよう

彼女は 2007 年の時に 19 歳でパリの大学に通っていた。彼女の宗教生活は高校入学頃に

大きく変化した。彼女は自分がそれまでは余り熱心なムスリムではなかったと語った。断食は守っていたが、礼拝は数日に一度だけだった。高校までの彼女にとって、イスラームは親が信仰しているから惰性的に自分も信者だっただけだと言った。

彼女は高校に入った頃にイスラームを見出したという。ファティマを含めた移民第二世代はフランスで生まれ、フランス国籍を取得することが可能か、または既にフランス国籍を取得している。彼らはフランスで幼児期から学校教育を受け、自由や平等といった人権概念を学習した。しかし、実生活では様々な差別体験を受けた者が多くいた。ファティマも彼女の外見によって差別を受けた経験があった。警察の尋問を受けたり、スーパーマーケットでお札の点検をされたり、万引きと間違われたりした。また、住居を探す際にも、電話口では受け入れられても顔を合わせた段階で断られるという差別にさらされた。

移民の子供たちは、自分たちが他の者と同様なフランス人と見なしていたが、このような差別経験によって、周りの者から「フランス人」と見なされないことを体験した。このことは、彼らにとって、自分は何ものなのか、という問題が生じることを示した。自分のことをフランス人と思っていたが、周りの者はそうは見てくれない。では、そんな自分とは何ものなのか。多くの第二世代にとって重要な問題となっているのは、自分の拠り所を見つけることだった（渋谷　2007）。

そのような彼らにとって、父母の宗教であるイスラームは、自己の拠り所のひとつとなりうるものであった。ファティマは礼拝や断食といったムスリムの義務と考えられているものを守るだけではなく、アラビア語の習得やイスラームの教義に関する本を率先して読むようになった。そのようなときに彼女は、ムラッドからの依頼で講習会に参加するようになった。

彼女は、教室に参加し始めた頃、非ムスリムに対して、教養を高める目的でイスラームの教室を開催することに批判的だった。彼女が批判的だった理由の一つは、先のこの教室に批判的だったムスリムの意見と同じように、非ムスリムにはイスラームを正しく理解することはできないと考えていたからだった。

さらに、教室の方向が教義中心であるよりもフランスとイスラームとの関係を中心にしており、教義を重視していないのも批判点の一つだった。そして、このようにイスラームの「本質」ではなく表面的なものを教えると言うことは、真剣にイスラームを信仰している自分のプライドを傷つけることになり、さらにイスラームへの冒涜にも思えた。

私は最初の頃はこの教室に行くことがとてもいやでした。自分で自分のことを馬鹿にしているようだった。吐き気がするくらいでした。それでもムラッドは私が幼い頃から知っていたし、中学校の先生でもあったから、彼から頼まれたら断ることはできなかった。だから参加し続けました。

彼女にとって教室に参加することは、自分が見つけたイスラームという自己のよりどころを踏みにじるように思える行為であり、とても嫌悪感を抱かせるものだった。しかし幼少時代からの知り合いであり自分の学生時代の教師であるムラッドの頼みであったために、嫌々ながらも会に参加し続け、非ムスリムからのイスラームに関する素朴な疑問に応えていた。

その後およそ一年がたった 2007 年末には、彼女の中での教室への意味づけが変わっていた。彼女が教室に対し定義を見いだすようになった大きな要因は、参加している非ムスリムのフランス人に対する再評価だった。彼女は、始まった当初は、参加者は趣味できているのだから参加したいときにだけ参加するような気ままなものと考えていた。しかし参加している非ムスリムたちは、用事があって出席できない時をのぞけば、多くの人が欠かさず参加していた。

さらに、彼らはまじめに教室に取り組んでおり、テキストをちゃんと読んできて各自が自分なりの疑問点をもって会に参加していた。その結果、非ムスリムの彼らのイスラームの理解は、飛躍的に進んだ。会の当初は、参加者の多くはマスコミによるイスラームへの一方的な報道を固定観念として持っており、イスラーム主義が代表的に示しているような暴力的な側面やマスコミが大きく取り上げることが多い女性差別的な面のみを強調して質問することが多かった。そのような質問をされるとファティマは嫌悪とともに、相手に対する侮蔑を抱いたという。

しかし回数を経ると、参加者との議論の中に、ファティマが即答できない質問が含まれるようになった。その答えを求めてファティマはイスラームに関する文献に当たって調べるようになり、彼女にとっても会に参加することは、イスラームの知識を高めることとなった。

さらに会に参加し始めた当初は、ファティマはフランスに住むムスリムのイスラーム実践を、正当な教義から逸脱したものとして否定的に捉えていた。しかし、教室の中で、食事会などの機会に他のムスリムたちから、フランス社会の中での法的・社会的制限のなか

でイスラーム実践を変容させながら、苦労しながらも熱心に行っている姿勢を積極的に評価するようになった。

ファティマは、会の当初に非ムスリムはイスラームを理解することはできないと、自分がムスリムである立場から判断を下した。しかし会が回数を重ねるとともに、非ムスリムの理解力の良さを発見するとともに、この教室が非ムスリムにマスコミが取り上げるような偏ったイメージ以外の、フランス社会の中でのイスラーム実践の多様性を知ってもらうきっかけになっていることを見いだした。そこで、2007 年の末段階で、彼女は非ムスリムにイスラームを教えるというこの会の意義を肯定的に評価するようになった。

９．おわりに

本稿ではマスメディアによるイスラーム・イメージの形成とムスリム/非ムスリムというカテゴリー化の課程を明らかにした後、移民ムスリムによる「イスラーム教室」活動に関する地域住民や参加者からの反応を通して、メディアによるステレオタイプ化したイスラーム・イメージの強さとともに、ムスリム移民たちの活動が既存のムスリム/非ムスリムというカテゴリーに与える影響について考察した。

1970 年代後半以降、イランにおけるイスラーム革命や 1989 年のサルマン・ラシュディ問題、そして 911 のテロといった国際社会の中でイスラームの存在が欧米社会を中心に問題となることがあった。フランス国内ではモスク建設や 1989 年にモロッコ出身女子生徒がスカーフをかぶって学校に登校することが社会問題化したスカーフ事件が起きた。

このような 80 年代以降のフランス社会の文脈の中で、イスラームが社会問題化していった。そしてこのような社会問題化した背景には、フランス社会が、「外部者」であるムスリムを他者としてカテゴリー化し、ステレオタイプ化した内容で報道することで、フランス社会と相容れない存在というイメージを形成した過程があった。

イスラーム教室の活動を、会の活動を否定的に評価する者が非ムスリムでもムスリムでもいた。教室がイスラーム主義のような過激な考え方のものを生み出すのではないかと心配する非ムスリムがいた。またイスラームの教室を開くことで、非ムスリムに自分たちの地域にまでイスラーム主義者が押し寄せてきたという脅威をもたらすことになると考え否定的に評価するムスリムがいた。さらに、ムスリムの中にはイスラームを理解できるのは

ムスリムだけであり、たとえ教室を行っても非ムスリムにはイスラームを理解することはできないとみなし、ムスリム／非ムスリムの区別を行った。彼らの否定的な評価は、マスコミ報道などで取り上げられるステレオタイプ化されたムスリムと非ムスリムというカテゴリー区分を単純再生産したものだといえる。

しかし非ムスリムにしろムスリムにしろ、このような教室が地域内の多様性を相互に理解する一つの機会となっており、この活動をとおして、否定的にステレオタイプ化されたものとは別の、現実に則したフランスのイスラームの現状が理解できる可能性を示唆し、肯定的に評価する者がいた。

また教室の参加者にとっては、この会での経験は、彼らにとってムスリム/非ムスリムという区別を相対化させた。テキストの読解による基本的な知識の獲得や、近隣に住むムスリムとの宗教に関する会話をとおして、これまで、彼らが雑誌やテレビから得てきたイスラーム・イメージとは異なりフランス社会との適応を目指した「フランスのイスラーム」が生み出されている過程であることを理解し、イスラームとの共存のために、フランス社会も変わっていかなければならないとフランス社会イメージを変える必要を意識し始めるようになった。

同じような、既存カテゴリーの変容はムスリム側からも見いだせた。イスラームを熱心に実践し、自分のよりどころと見なしていたフランス生まれの第二世代の女性は、会に参加した当初は、ムスリム/非ムスリムという区別を持ち込み、会を行っても非ムスリムによってはイスラームを理解することはできないと否定的に捉え、表面的な教義のみを教えるのは、自分がよりどころとしているイスラームを冒涜しており、自分のプライドを傷つけることになると考えていた。

しかし、会に参加する回数が増えていくと、彼女の評価は変わっていった。参加している非ムスリムの年心な態度や理解力の高さから、非ムスリムによるイスラームの理解可能性を認めるようになった。つまり、彼女はムスリム/非ムスリムという区分を相対化し、非ムスリムである「フランス人」を肯定的に評価するようになった。さらに、近隣住民のイスラーム実践にふれることで、フランス社会の中でムスリムによる実際の宗教生活の重要性を認識する機会となった。

メディアは、パリ郊外に住むムスリム及び非ムスリムのお互いに対するイメージ形成に対して大きな影響を与えた。しかし、両者はお互いに直接触れあう経験を経ることで、ム

スリム／非ムスリムという区別を相対化することが可能となった。ムスリムにしろ非ムスリムにしろ、参加者は、イスラーム教室での経験を経るにつれて、メディアが提示するカテゴリーに対して違和感を抱くようになり、既存のカテゴリーに対して新たな意味づけのための意見交換や交渉を行った。

イスラーム教室という場は、結果的にムスリム及び非ムスリムにとって両者が直接に触れあい語り合うコンタクト・ゾーンを提供することになっていた。コンタクト・ゾーンという表現は、これまで植民地状況での支配側と被支配側との権力関係に基づいた相互行為的次元を示すものとして用いられてきた（Pratt　2008[1992]）。しかしコンタクト・ゾーンを、イスラーム教室のように、異なった文化を持つ移民やマイノリティとホスト社会またはマジョリティの二者間のそれぞれが、主体的に異文化の相互受容が行う交渉の場として用いることで、これまで共時的にしか捉えられてこなかったマイノリティ・マジョリティ関係や移民とホスト社会との関係の動態性や変化可能性を捉えることができるようになると考えられる。

引用文献

Cesari, Jocelyne

1994　*Être musulman en France*,Paris:Karthala.

海老坂　武

1992　『思想の冬の時代に』東京：岩波書店。

Gastaut, Yvan

2000　*L'immigration et l'opinion en France sous la Veme République*, Paris:Seuil.

林　瑞枝

2001　「イスラム・スカーフ事件と非宗教性」『普遍性か差異か：共和主義の臨界、フランス』（三浦　信孝編）、pp31-48、東京：藤原書店。

Kepel, Gil

1987　*Les banlieues de l'islam*,Paris:Seuil.

私市　正年

2004　『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』東京：白水社。

内藤　正典

2004　『ヨーロッパとイスラーム』東京：岩波書店。

内藤　正典、阪口正二郎（編）

2007　『神の法 vs 人の法』東京：日本評論社。

Pratt, Mary Louise

2008[1992]　*Imperial Eyes*,London and New York,Routledge.

サイード, エドワード W

1996（1981）　『イスラム報道』（浅井信雄・佐藤成文訳）東京：みすず書房。

Schor, Ralph

1996　*Histoirede l'immigration en France de la fin du XIXe siecle à nos jours*, Paris, Armand Colin..

Sellam, Sadak

1987　*L'islam et les musulmans en France*,Paris,Tougui.

渋谷　努

2005　『国境を越える名誉と家族-在仏モロッコ移民をめぐる多現場民族誌-』宮城、東北大学出版会。

2007　「在仏モロッコ移民第二世代の二重の排除：在仏マグレブ移民第二世代による都市暴動のトラ　ンスナショナルな背景」『ヨーロッパ基層文化研究』2: 57-68。